

英語リメディアル教育におけるスピーチ指導 —写真描写を用いた活動の実践報告—

英語教育センター 特任准教授 矢島真澄美

【要旨】

本稿は、リメディアル教育における写真描写を用いたスピーチ活動の実践報告である。本学におけるベーシック英語、いわゆるリメディアル教育の対象学生は、英語に対する苦手意識が強く、彼らの多くは英語との関わりを見出すことができずにいる。そこで、学習者と英語の関係をより密接なものにするために、彼ら自身が撮影した写真を描写するスピーチ活動を行った。その結果、学生が英語の活動に主体的に取り組み、スピーキングとライティング力において向上を実感したことが示唆された。

1 はじめに

近年、中学校で身につける英語の基礎学力が未習得とされる学生を対象とした大学のリメディアル教育において、コミュニケーションを中心としたスピーキング活動が学習への動機づけを高めるとして注目されている。清田（2010）は、大学の英語リメディアル授業では文法の復習や語彙力の強化など学力向上を中心とした指導する傾向が強いと指摘しつつ、「自己表現」や「対人関係」に重点を置いた活動を取り入れることが英語を苦手とする学習者の学習への取り組みに大きく影響すると指摘している（pp.41-42）。牧野・平野（2015）が行った調査では、学習者が英語の4技能の中でも特にスピーキングに高い関心を示していることが明らかとなっている。また、牧野（2016）では、文法とリーディングだけの授業とスピーキングを取り入れた授業を比較し、スピーキング指導が行われた授業が学生の自己効力感を高める効果があったことが報告されている。

スピーキングを取り入れた英語リメディアル授業の実践としては、牧野（2019）がある。牧野（2019）は、学生同士のピア・フィードバックを用いたスピーチトレーニングに取り組み、学習者同士が互いのスピーチの問題点や改善方法について意見を交換ながらスピーチ技術を繰り返し練習することは、「楽しい」と思える活動であり、さらに英語を「話す」ことに対する抵抗感を軽減し、学習者の自信と学習意欲を高めることにつながったと報告している。

以上のようにリメディアルの授業において、スピーキングやスピーチ活動が学習意欲の向上に効果があることは確認されているが、英語に苦手意識を持つ学習者に対して実際に積極的な

活動への参加を促すことは容易ではない。たとえば、筆者が実施している授業でスピーチ活動を行った際、原稿を作成する過程で、授業で学んだ文法や単語の知識を用いるのではなく、自分の言いたいことをすぐに日本語でスマートフォンやPCなどの自動翻訳に入力し英文を作るという場面が見られた。また、発表する段階では、自分が作成していない文章をただ読むことに終始し、発表の意図が聞き手に伝わらないことが多々あった。このことは、学習者がテーマに関心を抱くことができていないこと、テーマとの密接な関係を築いていないことを示唆している。換言すれば、スピーチ活動では、学習者が取り組みたいと思うテーマを設定することが不可欠であると言えるだろう。

英語による学習活動への動機づけを高める活動内容について、村野井（2006）は、学習者が内容に「引きつけられた場合、学習者は積極的な姿勢」となり、その結果として彼らの「気づきや理解が深く、強く促される」と述べている（p. 17）。そして第二言語習得において、文法や語彙など言語の形式的側面だけでなく、授業で扱うテーマについて、学習する言語によって内容を理解し、知識を深め、それらを表現するという「内容中心第二言語学習」が重要だとしている。はたして、英語の習熟度が低いリメディアル授業の学習者が活動自体に意味を見出し、主体的に取り組むには、どのようなテーマを扱うことができるだろうか。

2 リメディアル授業におけるスピーチ活動の問題点

筆者が担当する大学1年生のクラスには31名の学生がいる。大学の方針として英語4技能の総合的向上が目標となっていることからスピーチ活動を取り入れた。しかし、スピーチの原稿を作成する段階、及び実際に発表する段階において以下の2点が問題となった。

第一にスピーチの原稿を作成する際に、学習者が自ら原稿を作成しないということである。本研究に先駆けて同クラスで前期の授業で行った「将来行きたい世界遺産の紹介」というテーマのショートスピーチは、学生がそれぞれ興味を持った世界遺産について英語5文で紹介するものであった。授業では、文法を復習し、練習問題を行った後に「将来行きたい世界遺産の名称」、「世界遺産がある場所」、そして「自分が行きたい理由」を書く課題に取り組んだ。その際、授業で扱った文法や単語を使うのではなく、自分の言いたいことを日本語でスマートフォンやPCの自動翻訳機に入力し英文にする場面が見られた。学生に感想を書かせたところ、「自分自身が思っていることや説明したいことを日本語から英語に置き換えて話すのが難しい」、また「今回のスピーチの授業を通して自分の言いたいことを英語に変換することが難しかった」などの回答があった。牧野（2019）でも指摘されているように、学習者の基礎学力が十分ではないことも主体的に課題に取り組むことができない要因の一つとして考えられる。しかし、I want to go to Mt.Fujiのように場所の名称を変えるだけであっても、自分で英文を作成しない

ということは、英語力の問題だけではないと推測できる。そして、学習者が何を話せばよいのかなど発表内容に対する不安を抱えており、そのような不安が彼らの学習意欲を低下させているのではないかと推測した。このことは著者がまず取り組まなければならない課題であると感じた。

次に発表の段階では、写真をスライドで提示する姿勢は見られたが、写真については説明がなく、背景としてのみ表示されていることが気になった。また、発表者は事前に準備した原稿を教壇に立ちただ読むだけとなり他者が意識されていない発表姿勢が問題として考えられた。スピーチの準備として実際に話す練習を行わなかった学生も多く、準備不足も感じられた。発表についての感想としては、「スピーチするときの目線や声量に気を付ければよかったと感じた」「暗記しても発表時に出てこなかったので発表の練習が必要だった」「スピーチの原稿の読み込みが足りていなく、スムーズに読めないことがあった」という回答があった。これらの回答からは、発表者が「自分がどのように話したのか」は意識されていたが、「他者がどのように聞いているのか」という他者を意識した発表までには至っていなかったことがわかった。

以上のように「将来行きたい世界遺産の紹介」をテーマとしたスピーチ活動は、原稿を作成する段階においても、発表の段階においても学習者が自信を持ち、他者を意識して情報を伝えようとする積極的な姿勢は確認できなかった。このことから、学習者の多くは課題との関わりを見つけられずにいること、また英語が他者に情報を伝えるコミュニケーションの道具として認識されていないことも推測された。そこで筆者は、学習者がより身近に感じられるテーマと学習者が自信を持って話すことができる内容が必要であり、そうすることで学習者が英語との関係を密接にしていくことが、主体的な学びにつながると考えた。

3 写真描写を取り入れたスピーチ指導

学習者がより身近に感じることができるスピーチのテーマとして彼らが近年手軽に用いているスマートフォンに保存された写真に着目した。第二言語学習における写真や絵、映像などの視覚教材の可能性については、ライト(1981)が「人が聞いたり話したりしたいと考える時には、思考と言語の密接なつながりがある場合が多く、このつながりが密接であればあるだけ、使用される言語は理解され記憶にとどめられる」とし、より身近な画像を学習に取り入れることが言語習得において有効であることを指摘している (p.142)。また、Wright (2001)でも、言語教育に視覚的情報である写真を用いることによって学習者はその画像について客観的または主観的に、それぞれの解釈を述べることができるため、学習者の能動的な活動への参加につながるとしている (p.17)。

Lavalle & Briesmaster (2017) は英語を第二外国語とする学習者のスピーキングにおける

写真描写について検証し、ライト（1981, 2001）と同様に、写真描写を用いたスピーキング活動が、彼らの想像力を働かせることにつながり、学習過程がより興味深いものとなると指摘している。また、学習者が写真を描写することは、第二言語を習得する際の英語を話すこと、また授業に参加することへの不安を軽減させることも報告している（p.7）。

実際に写真を用いて写真を描写する活動例としては、守田他（2016）が写真描写を英作文に取り入れている。守田他は、写真の内容を整理し、順序立てて説明するという英語話者に見られる分析的な視点を学習者に習得させることが、よりわかりやすい英語を書くことに繋がると述べている（p.70）。具体的に、習熟度の低い学習者に対してライティング活動では、主語を明確にして能動態で英文を作るという文法の側面と、推論と結論文を書くという文章構造の側面からの指導を実施し、能動態と英語の文章構成を意識したことで、「わかりやすい」英語を書くことにつながったことを明らかにした。守田らの研究は、写真描写をライティング指導に取り入れた実践であるが、学生が視覚的情報を理論的にわかりやすく伝えるという点において本研究が試みようとするスピーチ活動と立ち位置を同じくするものである。

以上のように、視覚的な情報が学習者の動機づけを高めること、また学習への積極的な姿勢を促すことは立証されている。また、知覚的な情報を分析的視点で整理するという取り組みを行うことが他者にわかりやすい英語を書くことにつながることも明らかとなっている。そこで後期のスピーチでは学習者がより身近に感じ、彼らが撮影した写真を描写する活動を取り入れることとした。そうすることで「撮影の意図」「映し出された被写体の状況」を自信を持って具体的に説明することができるようになり、学習意欲の向上と主体的な学習姿勢につながるのではないかと考えた。

4 本研究の目的

本研究の目的は、英語のリメディアル授業において、学習者が主体的に取り組むことができるスピーチ活動の一つとして写真描写の可能性を検討していくことである。そして、学習者自身が撮影した写真画像を用いたスピーチ活動を行うことで、積極的に学習に取り組む姿勢を促していく。さらに学習者自身が原稿を作成し、他者を意識したスピーチを行うことで英語力の向上を実感できたのかを検証していく。

5 手続き

5.1 対象者

本研究は、英語を専攻としていない大学1年生（工学部）を対象としている。入学時プレースメントテスト（TOEIC Bridge）によって習熟度が最下位（スコア0から47）となった学生

計31名に対して本実践を行った。対象者は工学部の学生であり、工学系の専門用語を学ぶことを目的とした教科書が指定されていた。そこで、写真描写に使う過去形、進行形、未来形、前置詞などの文法は教科書とともに配布資料を用いて復習した。

5.2 手順

後期合計15回の授業において、4回にわたってスピーチの説明、題材選択とグループワークによる課題の確認、原稿作成とスピーチ練習を行なった。なお、90分の授業では、最初の60分は教科書を用いたリーディングの時間とし、残りの30分をスピーチ活動とした。

5.2.1 スピーチの説明

以下の評価項目は、TOEICや英語検定試験などのスピーキングの採点基準、守田他（2016）また牧野（2019）を参照し、本実践の対象者に合わせて設定したものである。

1回目の授業では、写真を描写するための評価項目を提示し、学習者が具体的に何をどのようにするのかを筆者が説明した（表1）。4人のグループとなり、それぞれのスマートフォンに保存された写真について、「何が写っているのか」「いつ撮影したのか」「どこで撮影したのか」を話し合ってもらった。それらの内容を踏まえて、感想を踏まえたまとめを一文で考えてもらった。1回目の最後には、それぞれのグループで最もよく描写ができたと言われた人たちに教室の前に立って再度発表をしてもらった。

第1回目のグループワークからは、2つの問題が浮き彫りとなった。1つ目は、できるだけ描写しないで済むように被写体や情報量の少ない写真を選ぶ学生が少なからずいたことである。2つ目は、守田他（2016）も指摘しているとおり、視覚的情報を整理し、「写真のテーマは何か」を日本語であっても英語であっても一文で言い表すことが難しい学生がいたことである。そこでまとめの一文はこちらであらかじめいくつかの例文を提示することとした。

表1 評価項目：スピーチの内容

スピーチの内容	チェック
写真の主題は何か（一文で述べる）	
時間や場所について（それぞれ一文程度）	
人物は何をしているのか（進行形）	
予測できること（過去形、または未来形）	
まとめ（一文で述べる）	

5.2.2 題材の選択と発表の条件

2回目には、1回目に実施したグループワークの様子を踏まえて、次の3点をスピーチの条件として提示した。

- (1) 2名以上の人物が写っている写真を選ぶこと。
- (2) 1分間スピーチを続けること。
- (3) 原稿を暗記すること

使用する画像は学習者の自由としたが、画像には2名以上の人物が写し出されている必要があるという点を強調した。視覚的な情報をまとめる作業を促すことが必要と考えたからである。

また発表の制限時間を1分とした。時間を制限することは、内容の過不足を補うだけでなく、選ぶ写真の情報量を均等にもすることにも役立つと考えた。さらに原稿の暗記は、学生がただ暗記した内容を述べるということも予測できたが、発話の練習を促し、発話という点での不安を軽減し、他者を意識したスピーチとなることを目的として設定した。

問題点としては、授業では、自分の写真をクラスで見せることに消極的な学生が2名ほどいた。「2人以上が写っている写真を持っていない」、または「手描きのイラストでもよいか」という質問があったが、写真の顔は隠すことを許可し、教室内で同意があれば学習者同士でスピーチ用の写真の撮影を許可するなどして、イラストやマンガなどではなく写真を用いることを原則とした。以上を踏まえた上で学習者には写真の選択を指示した。

5.2.3 原稿作成とスピーチ練習

3回目には実際に評価項目に沿って、それぞれ英文を作成してもらった。自動翻訳機能は使わないように指示したが、単語を調べるためのスマートフォンの使用は認めた。これは、学習者のほとんどが辞書を持っていないためである。なお、原稿が終わったとした学生にはペア組んでもらい、時間を測りながらスピーチの練習を行うように指導した。また完成した原稿は本学が導入している学習システムから送信させ、文法の間違いを指摘し、原稿の修正を促した。学生が実際にスピーチ活動で作成した原稿の一例を付録に示す。

表2 評価項目：スピーチの技法

スピーチの技法	チェック
発音	
流暢さ	
声量	
明確さ	

5.2.4. スピーチ練習

3回目に引き続き、4回目も原稿ができた学生からペアになって時間を測りながらスピーチの練習を行うように指示した。原稿を暗記することは、授業外の課題とした。以下のスピーチの技法を意識しながら練習をするように説明した。

5.2.5 発表

5回目以降から発表を行った。発表のスケジュールは、googleのスプレッドシートで管理し筆者と学生で共有した。学生は、希望する日にちに名前を入力し、クラス内で共有した。

発表は教室内でパワーポイントによって写真を提示し、発表者以外は評価項目をチェックしながらスピーチを聞くように指導した。著者は発表後に個別にフィードバックを行った（表1、及び表2）。

6 アンケート結果

本実践では、対象となった31名のうち体調不良との理由で15回目の授業を欠席した学生を除く25名にアンケートを実施した。質問は以下の通りである。

- Q1. これまでの英語の授業で、写真描写を行ったことはありますか。
- Q2. Q1であると答えた人は、どのような場面で行いましたか。
- Q3. 写真描写で英語のスピーキングを行う方法については、授業内の説明で理解できましたか。
- Q4. Q3で選んだ答えの理由を書いてください。
- Q5. 写真描写のスピーチの準備時間はどのくらいでしたか。
- Q6. 準備では何に一番時間をかけましたか？具体的に書いてください。
- Q7. 英語で写真を描写するという経験はどうでしたか。
- Q8. 写真描写を行うことで、英語のどの能力が向上したと思いますか。向上したと思う能力全てにチェックを入れてください。（複数回答あり）
- Q9. Q8で答えた中で、具体的にどのようなことが向上したと思いますか。
- Q10. 写真描写のスピーチを通して、英語に対する意識に変化はありましたか。
- Q11. 写真描写のスピーチの感想を書いてください。

6.1 写真描写の経験とスピーチの説明について

「これまでの英語の授業で、写真描写を行ったことはありますか」という質問については、25名のうち28%の7名が「ある」と答え、72%の18名が「ない」と答えた（図1）。「ある」と答えた7名に「どのような場面で写真描写を行なったのか」を聞いたところ、全員が「中学や高校の授業で行った」と回答した。

また実践では1回目に写真描写のスピーチの課題と方法について確認するために、評価項目を提示しグループワークを行った。その説明については、32%にあたる8名が「まあまあ理解できた」と回答し、68%の17名が「よく理解できた」とした（図2）。Q4にて、Q3で選んだ答

えの理由を自由記述として、回答してもらった。その結果、学習者に対して評価項目を提示したことによって彼らが自分たちの行うべき活動内容が明確になっていたこと、またグループワークの際に著者が各学生に対して声がけを行なったことが迷わずに活動を行うことにつながった可能性が示唆された。実際の発表の前に予備練習としてグループ活動を行うなど、活動の流れと目標を明確にしたことで、学習者の多くがスピーチの内容に集中し取り組むことができたのではないだろうか。

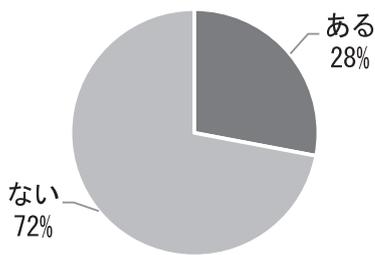


図1 Q1. 写真描写の経験 (n = 25)

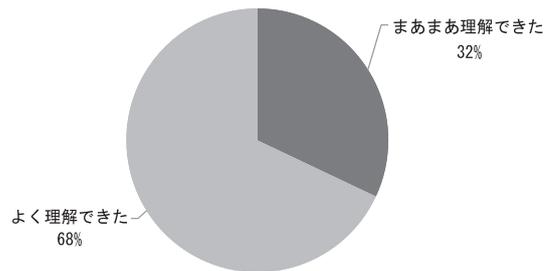


図2 Q3. 写真描写とグループワーク

表3 Q4. Q3の理由 (自由記述)

<p><「よく理解できた」> 先生が一人一人評価をしてくれ、更に助言もあったため。 難しいスピーチ方法ではなかったので理解できました。 スピーチの評価の基準の記したプリントの提示があり、そのプリントの記載で十分理解できたから。 写真を説明するにあたって相手に何を伝えればいいのか分かったから一度中学でもやっていたから。</p> <p><「まあまあ理解できた」> 発表の部分で時間を余してしまい、文法の使い方を間違っていたから。 先生が採点箇所を丁寧に教えてくれたから。 今までのスピーチとはまた違って、主人公を絞って説明する方法を理解することができたから。</p>

6.2 スピーチの準備について

原稿作成やスピーチリハーサルなど学習者自身が授業時間外で行った学習は、ほとんどの学生が1時間以上準備にかけたと回答した(図3)。また、具体的に「準備では何が一番時間をかけたか」を自由記述で尋ねたところ、「英文の作成」という答えがほとんどであった(表4)。

英作文という回答は、たとえば「暗記」など発話を伴う練習と比較すれば、非常に高い割合となっている。しかし、自由記述を見ていくと、「わかりやすく」や「説明しやすい写真を選ぶ」という回答があり、学生が「伝える」ことや「他者」を意識してスピーチの準備をしていたことが推測できる。

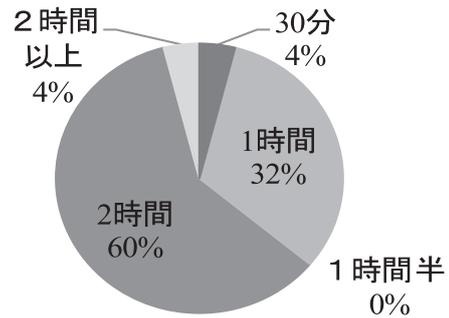


図3 Q5. 準備時間

表5 Q5. 何に一番時間をかけたのか（自由記述）

<p><原稿作成> 文章をわかりやすく英文にすること 展開を作ること スピーチの評価基準を満たす文で、聞き手が理解しやすい文を作成すること。 文章を作るときに何を一番説明したいか絞ること 文章の構成。 文法を考えるのが大変だった 自分が伝えたい内容を英語で考えるのが難しかった。</p> <p><発話を伴う練習> 暗記すること</p> <p><題材選択> 説明しやすい写真を選ぶこと できるだけ聞いていて、聞き手にわかりやすいように文を作って、発表すること。</p>
--

6.3 発表について

発表に関する意識については、「難しかった」という回答が32%で、「まあまあ難しかった」が68%であった（図4）。

「難しい」と回答した学生に理由を尋ねたところ、自由記述は大きく「内容説明」と「発話」の2つに分類することができた（表5）。「内容説明」については文章を作ることに関して難しさや視覚的情報を整理しまとめることへの難しさが確認された。発話については、人前で話すことや「原稿を暗記することに対する感想が多かったが、聞き手を意識した姿勢も割合としては多くはないが見受けられた。

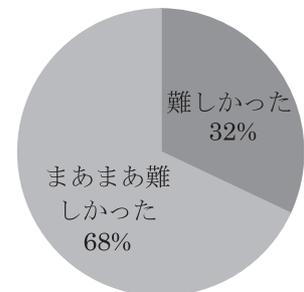


図4 Q7. 発表に関する意識

表6 難しいと思った理由（自由記述）

<p><内容説明> 普段、英語で写真の描写を説明することがなかったから。 これまでの写真のスピーチでは詳しく説明をしていなかったから。 文法の使い方や単語が理解できていなかったため。 日本語を英語にすることが想像以上に難しかったから。 写真のどこを描写すればよいか考えなければならなかったから。 写真の全体を捉えて関係性や予測されることなどを考えて文にすることが難しかった。</p> <p><発話> 写真を撮ったときの空間を、聴き手に想像させながら発表することが難しかったから。 文章を暗記しそれを思い出しながら早口にならないようにするのが難しかった。 英語の暗記や発音など、特殊な単語もあったのでそれが難しかった。 練習はしたつもりでいたが、本番で内容が飛んでしまった。</p>
--

6.4. 英語力に対する意識について

今回の写真を描写するスピーチ活動を通してどのような意識の変化があったのかを質問した。まずは、「英語におけるどの能力が向上したと思うか」（複数回答あり）を尋ねたところ、「話す力」18名（72%）と「書く力」16名（64%）となった（図5）。また「写真描写のスピーチを通して英語に対する意識に変化はあったか」という質問については、「あまり変化はしなかった」が4人（16%）、「自信が持てるようになった」が1人（4%）、「少し自信が持てるようになった」が20人（80%）となった。

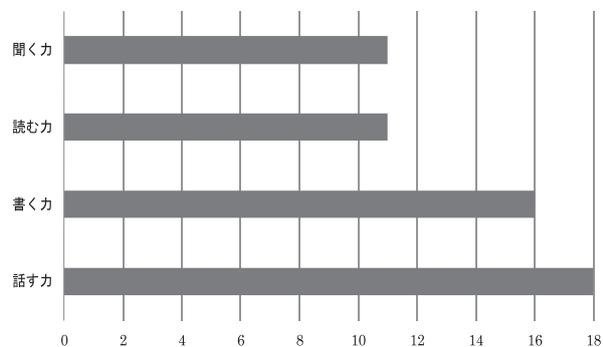


図5 Q9. 英語のどの能力が向上したと思うか

7 考察

本実践では、英語リメディアル授業において学習者自身が撮影した写真をスピーチで扱った場合に、学習者の意識はどのように変化するのかを、スピーチの準備段階と発表の段階、そして活動後とに分けて考察を行なった。その結果、学習者の80%がスピーチ活動の後には「少し自信が持てるようになった」と回答し、さらに「書く力」と「話す力」の向上を実感したことが確認された。このことから学習者自身が撮影した写真を描写するスピーチ活動は、彼らの主体的な取り組みを促す上で重要な役割を担ったと考える。

学習者自身が撮影した写真を用いたことの効果としては、多くの学習者が原稿を作成する段階で「自分の言いたいことは何か」を考え、「聞き手がわかりやすい英文を作成することを意識したことである。写真に映し出された一瞬は学習者自身の経験であり、「なぜその写真を撮影したのか」を述べることは学習者にとって関心の高いテーマであったと考える。換言すれば、撮影の意図は撮影者にしか分からないために、

その「正解」を知っている人物は、撮影者となった学習者自身なのである。そのことは、学習者が発表内容に自信を持って取り組むことができた要因の一つと推測する。

発表については、「写真を撮った時の空間を、聞き手に想像させながら発表することが難しかった」、また「緊張して写真ばかり見てしまっていたので次があるときは気を付けたいと思った」などのコメントがあった。原稿作成に比べると割合としては多くはないが、聞き手を意識しながら発表しようとする姿勢が確認された。また著者が本実践に先駆けて行なった「将来行きたい世界遺産の紹介」では、発表者が原稿を読むだけとなっていたことを鑑みれば、教室の前に立ちただ原稿を読むのではなく、他者を意識することの必要性を感じ、まずは伝えようとする姿勢があったことが示唆されている。

以上のことは、英語の習熟度が低いリメディアル授業の対象者にとって、写真を描写しながら彼らの体験や経験を話すという活動は、村野井（2016）でも指摘されているように、内容への関心と、その結果としての活動における「気づき」を生じさせたと言えるだろう。清田（2010）も報告しているように、学習者が自己表現を行うことは学習意欲の向上に大きく影響する。自分が撮影した写真を描写するスピーチ活動について、学習者に感想を尋ねたところ、「初めてのため緊張したがいろいろ考えて作り発表できたのでいい経験になった」、また「みんなのたくさんさんの写真が見れて、楽しかった」など活動自体を楽しんだ様子が窺えた。このことから、自分が撮影した写真についての説明は、自分を表現するための一つの機会を学習者に与えることにつながったと考える。

しかし、その一方で、「先生が用意した写真について説明すると個性が出て面白いのではないか」という意見もあり、学習者自身がプライベートな写真を教室で扱うことに対する若干の抵抗も感じられた。また、スピーチの練習についても授業内では十分に時間が取れていなかったと考えられ、スピーチについての指導をさらに行なっていく必要がある。これらのことは今後の課題としていく。

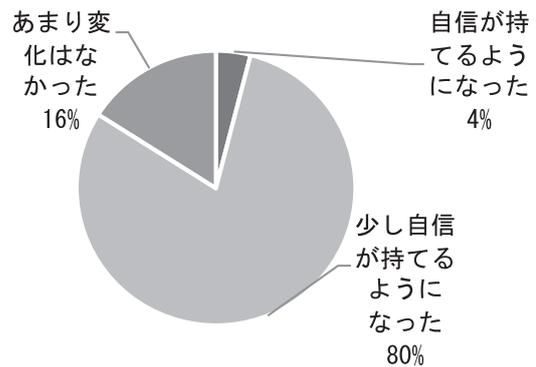


図6 Q10. 英語に対する意識

8 おわりに

本実践は写真描写の可能性を探り、学生が主体的に学習し、今後の彼らの学習に生かしていただけるための取り組みを検討する第一歩であり、試験的な実践報告となっている。写真描写をスピーチ活動で扱う際の前提条件などは今後さらに検討が必要である。しかし、学習者が深く関与するテーマとして、写真描写は学習者を主役とし、「考える」という姿勢を促すこと、「自己表現」をすることに貢献したと考えられる。この実践報告を踏まえて、今後さらにスピーチ活動における写真描写の可能性について検討しつつ、リメディアル教育におけるスピーチ指導の研究を続けていきたい。

参考文献

- Lavalle, Pamela I. & Briesmaster, Mark(2017). The Study of the Use of Picture Descriptions in Enhancing Communication Skills among the 8th- Grade Students-Learners of English as a Foreign Language.*i.e.: Inquiry in Education*. 9(1) Chicago: the Center for Practitioner Research at the National College of Education, National-Louis University.
- 牧野眞貴.(2013a). 英語が苦手な大学生の自己効力感を高める授業づくり.リメディアル教育研究8(1), 172-180.
- 牧野眞貴.(2013b). 英語スピーチにおける協同学習の有効性—リメディアル教育を必要とする大学生を対象として—].近畿大学教養・外国語教育センター紀要外国語編 4(1), 99-116.
- 牧野眞貴.(2014). 英語力に差のある学生が混在する大学3年生クラスにおける携帯電話を利用したスピーチ指導 実践報告.リメディアル教育研究, 9(1),89-97.
- 牧野眞貴.(2016). 英語リメディアル授業におけるスピーキング指導と自己効力感の関係についての一考察. 英語教育研究, 39, 1-15.
- 牧野眞貴.(2019). 英語リメディアル授業におけるピア・フィードバック活動を取り入れたスピーチトレーニングの実践報告.リメディアル教育,13, 43-50.
- 牧野 眞貴・平野 順也.(2015). 英語リメディアル教育を必要とする大学生を対象とした英語学習意識調査. 近畿大学教養・外国語教育センター紀要 外国語編, 6(1), 39-55.
- 村野井仁.(2006)第二言語習得研究から見た効果的な英語学習法・指導法. 大修館書店.
- 守田美子, 池頭純子, 松岡みさ子, 松本由美. (2016) 写真を活用した英語ライティング指導 (視点の切替えを軸として) リメディアル教育研究, 11(2), 181-189.
- 清田洋一.(2010). リメディアル 教育における自尊感情と英語学習. リメディアル教育研究 5(1), 37-43.
- ライト, アンドリュー. (1981) 視覚教材: コミュニカティブ・アプローチと英語教育.小笠原八重 (訳). 桐原書店.
- Wright, Andrew.(2011). *Pictures for Language Learning*. Cambridge: Cambridge University Press.

付録

This is a picture of two men.
They are English and math teachers in my high school.
They are playing with fun poses.
The English teacher is raising his hands.
The math teacher is crossing his hands.
He is like Ultraman.
All the students who see this will laugh.
They will be very popular at school.
I look they look very fun.
However, they don't look like teacher.
I thought attitude was important.

学生が実際にスピーチ活動で作成した原稿の一例